

氏名	王海霞
学位の専攻分野の名称	博士（言語コミュニケーション文化）
学位記番号	甲言第9号（文部科学省への報告番号甲第431号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月16日
学位論文題目	FUNCTIONS AND DEVELOPMENT OF ENGLISH DISCOURSE MARKERS: A CORPUS-LINGUISTIC STUDY
論文審査委員	（主査）教授 八木克正 （副査）教授 神崎高明 教授 浅田壽男 滑明達（北京第二外国語学院教授）

論文内容の要旨

本論文は、英語のいわゆる Discourse Marker（以下 DM）の研究である。その研究の視点は、もとの表現がどのような過程を経て DM になったかの検証に中心がある。広く先行研究を再考し、独自の方法に基づいて、コーパスから得たデータを利用し actually, kind of, the thing is, you know what を深く分析している。目次・謝辞・梗概などのフロント・マター 14ページ、導入と本文 8章199ページ、文献目録15ページからなる。

基本的な方法と論文の流れは以下の通りである。データから理論を組み立てる帰納的方法（本人は bottom-up と言う）をとる。今日までの DM 研究にはいくつかの潮流があるが、「文法化」(grammaticalization) の考え方を基本に、句を修飾する単独の副調 actually, 一種の名詞句である a kind of, 主題を提示する主語 + be 動詞からなる the thing is, 主語 + 述語動詞 + 目的語からなる you know what それぞれが、別の経過をたどりながらも、段階的に本来の意味が希薄となり、DM となり、さらに談話の空白を埋める hesitation filler の機能をもつにいたったことを検証している。論文で扱ったこれらの項目は、談話の中で頻用されるにつれて、機能が多様化し、談話の中でさまざまな解釈が可能になることを数多くのデータを使って検証している。そして、このような研究によって、談話の意味解釈に重要な役割を果たす DM 研究の必要性を説き、言語の理解には欠かすことのできない働きをしていることを論じた。

以下、章別に要旨を述べる。

導入では、ah, oh, now といった「一見無意味」に見える表現はさまざまな名称を与えられるが、本論文では Discourse Marker と呼ぶ。これらの表現は、談話の中で命題内容に関わる役割はほとんどないが、コミュニケーションをスムーズにし、まとまりのある談話を構成する上で重要な役割を果たしている。過去の研究では、このような表現が談話の中で、句副詞 (phrase adverbial)、文副詞 (sentence adverbial)、コメント節 (comment-clause) といった辞書的な意味をもった機能と、辞書的な意味をもたない DM としての機能を区別しないまま同じレベルで扱うことが多かった。本論文では、例えば同じ actually といってもいろいろな機能をもっているが、それらの機能を参照しながら DM としての actually の役割を明確にしてゆくという方法をとっている。そして、それが本論文の独自性となっている。

第1章は、先行研究を広く調べ、語用論的視点、関連性理論、結束性の視点からの機能的な研究、アイマー

の機能的研究などの研究成果を簡潔にまとめた。その上で、本論文のコーパス言語学からの研究手法について概説し、その研究の意義を、「コーパスで得られた資料を分析し4つのDMの分析を通してDMの本質にせまり、ひいては言語教育や辞書学に貢献する内容をもつ」ことと述べている (p.28)。

第2章は、本論文の基本となる文副詞、コメント節、DMについて、それぞれの機能と特長について述べ、以下の章で使われるこれらの概念を詳しく比較し、それぞれの特徴を述べている。

第3章は、actually についての詳論で、現代英語のデータによって句副詞、文副詞、談話辞の機能をもつことが観察されるが、歴史的にもその順に発展してきたと想定することができる。この機能的発展は、文法化という概念によって説明できる。句副詞の役割は文の一部の句を修飾し「実際に起こったことである」ことを強調する。その修飾機能が文全体に拡大し、話者の主張が事実であることを強調する文副詞の機能を獲得する。このような「実際に起こったことである」ことを強調する副詞的機能から、コミュニケーションにおける矛盾や唐突性を緩和するために談話に結束性を与える機能へと発展し、DMとしての機能を獲得する。DMの機能としては、大きく「テキスト全体の結束性を高める機能」と、発話を和らげ矛盾や唐突性を和らげる「対人機能」をもつ。テキスト機能はさらに、話し相手の発話の修正、先行談話の修正、話題の転換といった機能をもつ。対人機能としては、修正発話を和らげる機能、唐突性を和らげる機能をもつという。

もともと actually は句を修飾する様態副詞であったが、修飾範囲を拡大し主観的に主題の正当性を主張する文副詞へと機能を拡大した。それが文法化に伴い本来の意味を失い、談話の中での機能へと拡大したと考えられるとする。

第4章は、名詞句からDMへと機能転換を果たした (a) kind of の分析である。これは名詞句 + 前置詞の形から、疑似文副詞、文副詞、さらには文法化によってDMの機能を獲得したと考えられる。DMとしての (a) kind of は対人関係において相手のメンツをおびやかすのを和らげるものとして機能する。さらには談話の空白を埋める hesitation filler (これもDMの一種) としての機能をもつ。疑似文副詞、文副詞の機能を担う場合は、ある表現法の適切性について躊躇があることを示す一種の hedge (垣根言葉) となる。疑似文副詞の場合は、典型的には名詞の前に来て (X is) (a) kind of a Y の形をとる。文副詞の場合は述語動詞の前か文尾にきて「文全体の表現方法が必ずしも適切ではないかもしれないが」、という躊躇表現にする。このような対人関係に配慮した機能から、さらには、DMとしての機能を発達させている。ここにも「対人的機能」と、「テキスト的機能」が見られる。まず、対人的機能としては、次の2つの場合がある。第一は、表現が比喩であることを示す機能をも担う場合がある。第二は、このような本来の意味がさらに弱まって、談話の中のいろいろな位置に現れ、話者の主張を和らげる機能、話し手から聞き手に対して心理的接近を狭める機能である。テキスト的機能としては、談話の空白を埋める hesitation filler としての機能をもつ。DMとして機能する場合、音韻的な縮約が起こり、a を脱落させた kind of やさらに of を縮約した kinda のような形になることがあるとする。

第5章は、the thing is の分析である。この表現は、もともとは that 節を従える主節を構成するものだが、主節と挿入節の中間的用法、コメント節、談話辞と変化していったものとする。主節としての機能は the trouble is/ the problem is などと同じく、述べようとすることにまず結論的な指標を与える (これらの名詞を Schmit (2000) は shell noun と呼ぶ)。the thing is が文の命題部分から独立して使われる場合がある。主節の場合は thing にストレスが置かれるが、挿入節の場合は thing にはストレスが置かれず、軽く、早く発音され、the thing is 全体が独立した音調単位を構成する。統語的にも挿入節の後には疑問文の語順で現れる。文中でいろいろな位置に現れることができる。さらには、音調的な縮約が起こり the が落とされることがある。しかし、実際には主節を構成するか、あるいは挿入節を構成するか断定しがたいこともある。

さらに、話者がこれから述べようとすることに焦点を当てる機能から、節から遊離し、話者がこれから述べることに對する心的態度を表明するコメント節としての機能をもつに至ったという。さらに、(the)

thing is はほとんどそれ自体の意味をもたず、2つの談話を結合する結束の役割を果たす DM としての役割をもつにいたる。その DM としての機能は、前言を正当化するための理由を述べる合図、別の話者の発話を否定したり訂正を加える合図、話題転換の合図、また談話の空白を埋める hesitation filler として用いられる。DM として使われる場合 the が落とされるケースが目立つという。

第6章は、you know what についての詳述である。この表現を大きく、文の一部として使われる場合（非挿入的用法）と文中での機能はもたず、挿入的に使われる用法（挿入的用法）に分ける。非挿入的用法の場合、本来の疑問文としての用法から、指示的用法（話者・聴者が理解できることでその物を直接表現することを避ける場合に使う）、what 以下の命題を省略した疑問文がある。挿入用法として、コメント節、さらには DM としての機能を持つにいたったとする。そして、非挿入的用法から挿入的用法へと転換し、それぞれに上記の順に用法が発展してきたとする。DM としては、談話のかわきり、または終了の合図、先の談話の理由を述べる場合の合図、これからさらに詳述を加える合図、話題転換、話題がそれた後で元の話題に戻る合図、談話の空白を埋める hesitation filler として用いられるという。

第7章は、談話の空白を埋める hesitation filler として用いられる kind of, the thing is, you know what として機能するこれらの使い分けを、英語母語話者をインフォーマントとして確認を試みた成果報告である。その調査の結果、kind of は言葉をさがす時に、the thing is は話題転換のためのきっかけをつける時に、you know what は言いたいことを頭の中でまとめようとする時に使われる傾向があることがわかった。その傾向は、それらの表現が本来もっている意味と深く関係がある。しかし、その区別は必ずしも明確ではなく、区別できない場合もあるという。本人も認めるように、この調査は研究途上である。

第8章は結論を述べる。これまでの研究結果をまとめた後、中国での英語教育の中では DM が教えられることは少ないこと、また、中国の英語辞書の中でも DM の記述はまだ十分でないことを述べ、この研究が、中国での英語教育の面でも辞書学の面でも DM に注意を払う新たなきっかけになってもらいたいと述べている。

論文審査結果の要旨

1 審査要旨

審査で評価された点は以下の通りである。

全体として、内容のあるよくまとまった論文である。談話辞に関する先行研究を広く調べ、網羅的に文献に当たった面は特に評価できる。

actually, kind of, the thing is, you know what の具体的な問題についてはすでに日本や中国での学会で発表したものであり、十分な検証を経ており、具体的な用法については十分な記述ができた。you know what は先行研究に負うところが少なくないが、それ以外について、ほとんどオリジナルなものである。独創性という点からも十分に評価できる。

審査の段階で、なぜ文法化が起こるのか、との問いに対して、「今後の研究課題としたい」と回答した。

また、研究対象として選んだ項目を選択した理由が問われた。それに対して、「いろいろな表現が高頻度で使われる中で、一部のものが DM へと変化する。本論文で扱ったものは、副詞の actually、名詞 +of の a kind of、that 節を従える主節を構成する the thing is、命題省略の疑問文 you know what から派生した DM であり、それぞれの構造を代表するものである」と回答した。

コメント節、文副詞と DM は区別があいまいなところがあるという指摘に対して、「言語は本来そのような曖昧性を含んだものである」と回答した。

「中国での英語教育で DM がそれほど重要視されるかどうかはわからないが、それは今後中国でのこの研

究がどれほど浸透するかにかかっている」とのコメントがあった。

2 論文の課題

本論文が残す課題は、なぜ文法化が起こるのかに対する回答になるような研究を進める必要がある。なぜこれらの項目を選んだかという点について、それぞれ代表的なものであることは認めるにしても、それらがDMに発展する文法形式のすべてであるかどうかという点についての議論が必要である。すなわち、DM全体を見渡す視点が必要である。

また、コメント節や文副詞としての用法、DMとしての用法の区別の方法についてはもっと分かりやすい説明を試みるべきである。扱った項目のうち3つがhesitation fillerの機能をもつにいたったというが、それぞれやはり表れる環境の違いはあるはずで、その調査結果を述べた第7章は端緒にすぎず、今後の研究に待たなければならない。DMは辞書的な意味をもたないというが、hesitation fillerとしてのそれぞれ使い分けがあるならば、「辞書的な意味をもたない」とはどういうことなのか、について説明が必要であろう。

3 審査結果

本審査委員会は上のような課題をヒントに今後さらに研究を続けることを期待するものであるが、これらの課題は本論文の博士論文としての価値をなんら損なうものではない。特に、第3章から6章の内容は、日本と中国の大きな学会で報告し、多くの学者の意見を聞きながら改良を重ねてきた、検証済みの内容である。

今までに誰も論じたことのない困難な問題に取り組み、包括的な議論を貫徹した努力を高く評価し、本論文を博士論文に値するものとして報告する。